

RI 第 2640 地区職業奉仕委員会

『職業奉仕とは何か』

(ロータリーにおける職業奉仕の役割と本質)



2008-9年度 R. I. テーマ

夢をかたちに

第 2640 地区職業奉仕委員会

委員長 つのや こうじ
 角谷 浩二

はじめに

私の地区活動は地区青少年ライラ委員から始まり、今年の地区職業奉仕委員長で地区での活動も 10 年目になります。「10 年ひと昔」と言われますが、現在は時代のサイクルが速く、「ふた昔」の感があります。三軒ガバナー時代に最初の小冊子である「職業奉仕とは何か」を書かせていただきました。そして、次の平原ガバナー年度において二冊目の小冊子である「職業奉仕とは何か（職業奉仕の危機）」を、そして本年度の勝野ガバナー年度におきましては、過去 2 年間の地区職業奉仕委員長としての集大成として「職業奉仕とは何か（ロータリーにおける職業奉仕の本質と役割）」を執筆させていただきました。

私の職業奉仕理論は RI 第 2680 地区の深川純一 P G の「ロータリー学入門」、同地区の田中毅 P G の「職業奉仕の重要性と未来展望」の二冊を参考にさせていただいております。よく先輩方から「職業奉仕を勉強しなさい」と言われますが、勉強しようにも手続要覧だけでは理解できません。何がしかの手引書や参考書がなければ職業奉仕の本質は分かりません。私は、深川先生と田中先生が書かれた二冊の書物をできるだけ分かりやすく説明させていただくことに重点をおいております。そのために、お二人のお言葉を無断で引用させていただいた部分があることをご容赦願います。

何はともあれ、この小冊子が当地区のロータリーの理解に少しでもお役に立てれば幸甚に思っております。

「職業奉仕とは何か」

(ロータリーにおける職業奉仕の役割と本質)

目 次

『職業奉仕の誕生』	—————
『職業奉仕の本質について』	—————
『I serve と We serve について』	—————
『He Profits Most Who Serves Best について』	—————
『職業奉仕と社会奉仕について』	—————
『例会出席と職業奉仕実践について』	—————
『決議 23-34 号について』	—————
『ロータリー綱領と 4 つのテストについて』	—————
『職業奉仕総論』	—————

「職業奉仕とは何か」

(ロータリーにおける職業奉仕の役割と本質)

『職業奉仕の誕生』

まず、職業奉仕を理解するうえで知っておかなければならないことがあります。それは職業奉仕がどのようにして誕生したのかです。ロータリーは1905年2月ポール・ハリスを含む4名の会員で誕生いたしました。当初は心を開いて何でも相談できる友人を得るためのロータリー活動でした。そして仲良くなったついでに、それを取引に利用し、互惠取引をすればお互いの事業が発展するという発想が生まれ、初期ロータリーの目的は会員相互の互惠取引、相互扶助と親睦を目的としたものになりました。そこには職業奉仕思想なるものは存在しておりません。会員の互惠取引において一番重要なものは会員相互の信頼と信用です。そのため、親睦をとおして信頼と信用をつちかい、安心して取引ができることを大前提にしておりました。当時のシカゴの町は人を騙して商売をするのが当たりまえで、無法がまかりとおる時代でした。その時代にロータリークラブに入会すれば、信用のある商人から原価に近い値で仕入れができ、お金儲けができる。親睦でつちかわれた信用と信頼ができる仲間であるから安心して取引ができる。当然、誰しもが入会しよういたします。このため、初期ロータリーは爆発的にクラブ会員やクラブ数を増やして行きました。当時のクラブでは「統計係」という役員がおり、会員同士の取引内容の詳細をクラブでまとめ、例会で報告しておりました。このように、ロータリーは「お金儲け」の手段として発展し、瞬く間に会員が増加していったのです。当時のロータリアンは「クラブに入会できれば金儲けができる」という考えで入会した人が多く

いたことを念頭においていただきたい。

しかし会員の相互扶助と親睦を目的として誕生したロータリーは次第に内外から批判を受けます。新聞紙上において「ロータリアンだけが儲かっていいのか、これは経済の秩序を乱すものである」という批判をうけ、内からはドナルド・カーター（社会奉仕の父）が「もしロータリーを永続的に発展させていくなれば、自分たちの利益だけを追求するのではなく、世間の人達の共感を得なければならぬ」と説きました。ここにおいてロータリーは相互扶助と親睦を目的とした時代から大きく方向を転換し、社会奉仕や国際奉仕を中心とした時代へと変わり、物質的相互扶助は徐々に精神的なものに変わっていきました。しかし、初期ロータリーに入会した会員のほとんどは、親睦と互惠取引による事業の発展を期待して入会したのですから、もし物質的相互扶助を廃止したならばロータリーに入会したメリットがなくなり、会員減少にもつな갑니다。そこでポスト相互扶助となるべき理論としてアーサー・フレデリック・シェルドンによって唱えられたのが「**職業奉仕**」です。シェルドンは1910年第1回全米ロータリークラブ連合会年次大会（シカゴ）において、職業奉仕の原理原則である「**He Profits Most Who Serves His Fellows Best**」（仲間に最もよく奉仕する者、最も多く報いられる）という言葉を発表し、その一年後のポートランド大会でこの一文を「**He Profits Most Who Serves Best**」（最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる）と改め、ここにロータリーにおける職業奉仕思想が誕生いたしました。そして、1912年、ポール・ハリスはクラブ役員一覧表から「統計係」を削除し、ロータリアンに対する互惠取引の義務付けをなくしております。そして1916年のシンシナティ大会から一業種一人という大原則のもとに「**職業奉仕部門**」が始まっております。このように職業奉仕はポスト相互扶助として誕生したということを知っておいていただきたいのです。

『職業奉仕の本質について』

職業奉仕を理解するのには、「ロータリー運動は倫理運動である」ことを理解しなければなりません。ロータリーは倫理運動であるがために古来より色々な原理原則が誕生したようですが、これがロータリーだと言われるのが職業奉仕です。ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にありと言われております。このように、職業奉仕思想はロータリーの精神、哲学そのものです。単に社会奉仕さえすればよい、お金や物で奉仕すればよいというものではありません。我々はこの教えに基づいて活動するのがロータリーです。私は、最初に「ロータリー運動は倫理運動である」という言葉の「倫理」という言葉から説明させていただきます。非常に簡単な言葉ですが、この言葉を理解されていない方が多数おられるように感じます。「倫理」とは何か、それは「人とし、人間としての、正しく歩む道」です。人を騙すような、泣かすような行為をしてはいけません。非人道的、非社会的行為をしてはいけません。世のため人のために尽くしなさいという教えが「倫理」です。そしてその心を職業社会に適用していくのが「職業倫理」です。

次に、職業奉仕という言葉の説明させていただきます。この言葉において、「職業」とは、お金を儲けるという意味があります。これは自分のためのものであり、家族や従業員を養わなければなりません。そして「奉仕」とは、自分以外の人のために尽くすことです。職業は自分のためのもの、奉仕は自分以外の人のためのもの、全く逆の意味の言葉が一緒になって「職業奉仕」という言葉になっているため解りにくいのです。これは完全なるロータリー用語であり、辞書には載っておりません。それと、職業奉仕という言葉は、「**職業を営むことが、世のため人のための奉仕となる**」という意味があります。職業奉仕にとって、

ここが一番の難解な点であり、この言葉を理解しなければ職業奉仕は永遠の謎となってしまいます。ロータリーはこれを説明するのに、「職業の心」と「奉仕の心」は「ひとつの心」として説明しております。そして、この「ひとつの心」とは即ち、「世のため、人のために奉仕をする心をもって、職業を営むべし」という言葉で言い表されております。この言葉は少し抽象的で分かりにくいので、実践例で解説いたします。奉仕活動で道路の清掃奉仕活動をしたとしましょう。やり終えたあと、ふと後ろを振り返ると、汚かった道路が非常に綺麗になったと思いませんか、しかし道行く第三者から見れば、さほど綺麗になったとは言われません。でも、自分の気持ちからすれば非常に綺麗になったと思います。この「心」が大切なのです。これが「奉仕の心」なのです。ロータリー以外の諸団体は奉仕活動によって、自分の心が清らかになったらいい、心が満足したらいい、という考えで終わりますが、しかしロータリーは違います。奉仕活動によって清らかになった心を**職業の心**の中に取り入れてくださいとっております。これが**“職業の心と奉仕の心はひとつの心”**という考えなのです。世のため人のために奉仕をする清らかな心を**職業の心**の中に取り入れてくださいということなのです。そうすることによって、今までの職業のやり方が次第に少しずつ変わっていきますよとっております。これが「世のため、人のために奉仕をする心をもって、職業を営むべし」という言葉なのです。そして、この言葉の意味するところは、「人を欺くような、泣かせるような金儲けをしてはいけない。非社会的、非道徳的職業を営んではいけない。世のため、人のためになる職業を営まなければならない」と言っており、これは自分の職業に対して強く「倫理性」を要求しております。即ちこの言葉の本質は「職業倫理」を指しております。「ロータリー運動は倫理運動である」と言われておりますが、この倫理こそが「職業倫理」であり、ロータリーは**職業倫理を追求する運動**なの

です。そして、これが「**職業奉仕の本質**」でもあります。「職業を営むことが、世のため人のための奉仕となる」という考えは我々にとって非常に理解しにくい言葉です。ここで間違っはいけないのは、世のため人のために奉仕するというのが、原価に近い値段で物品を販売するというものではありません。そういうことをしたならば同業者に迷惑をかけることとなります。お金を儲けるという事にこだわらず、いかにして顧客が満足して商品や技術を得ることができるかを考え、社会の要求に応じていくその過程の中に職業倫理が存在するのです。

『I serve と We serve について』

ロータリーの奉仕とは、個人の職業倫理に基づいて、その心を職業社会に実践するものです。そのひとつの方法として社会奉仕があり、クラブ奉仕、国際奉仕があります。倫理を学び、人間の人格を向上させ、それをもって初めて職業社会にそして社会的弱者に対して奉仕ができるのです。ロータリーの第一義は何か、それは「**ロータリアンの心の開発**」です。ここに「ロータリーが単なる寄付団体、慈善団体、ボランティア団体ではない」、と言われる所以があります。ロータリークラブに入会が推薦されたとき、会員全員にそれを問う投票がおこなわれます。誰かが拒否すればその方は入会を許されない。これは入会に際してまでもロータリーはその人物の倫理を問うているのです。

ここで他団体との比較をしてみます。ロータリー以外のほとんどの奉仕団体の精神は「自分の職業で儲けたお金の一部を奉仕に使ってください。自分の職業時間の一部、もしくは余暇を使ってボランティア活動をしてください」という考えで、これは困っている人達を助けるという意味合いがあり「弱者救済をもって奉仕とする」という奉仕思想です。ロータリーも同じ奉仕思想を持って

おりますが、決定的に違うところがあります。それは彼等の思想の中には「個人の職業倫理」というものが含まれていないところにあります。ロータリー以外の他団体は「職業の心」と「奉仕の心」は互いに相反する心であり、決してひとつの心にはなりえないという考えを持ち、職業が同時に奉仕とは考えられず、それらは別々の世界に存在するものであると考えております。ゆえに団体での社会奉仕活動のみを選択しております。彼らの標語は「**Not I serve But We serve**」です。

ロータリーの標語は **I serve** です。ロータリーにおける奉仕の基礎は個人の職業倫理です。職業の心も、奉仕の心もひとつの心であると考え、そのひとつの心をもって、職業を営み且つ奉仕するのです。ロータリーにおいて倫理に反する儲けは存在しないし、倫理に反するボランティア活動も存在いたしません。もし仮に、人を欺き、泣かせたお金が奉仕に使われていたなら、それは真の奉仕といえるであろうか。もし仮に、人を欺き、泣かせた人間が平気な顔をしてボランティア活動をしていたならば、それは偽善者です。

ここでひとつの疑問点が生まれてきます。「ロータリーは **I serve** だといっているが、奉仕活動はクラブが主体となっておこなっているのではないか。ロータリアンはクラブの指示に基づいて活動をしている。これは団体奉仕であって **I serve** とは言えないのではないか」、という考えがあります。私は、「奉仕は個人の職業倫理に基づいて、奉仕の心を職業社会に、そして社会的弱者に対して実践するものである」と言っております。ロータリークラブとはロータリアンの集合体であり、奉仕の機会をロータリアンに与えるだけのものです。職業を持っているのはロータリアン個人ですから職業奉仕の実践ができるのであって、職業を持たないロータリークラブがいかにして職業奉仕の実践ができるのかです。ゆえに、クラブとしての職業奉仕の実践機能は無く、団体奉仕と言う概念

はありません。他の団体と同じ奉仕活動をしていても中身の考え方が違うのです。団体として活動するのではなく、個人の倫理に基づいて活動するのです。その集合体がクラブです。しかし、奉仕の実践は個人で行なうのが原則ですが、サンプルとしての団体例をクラブで示さなければなりません。これを誤解されている方がおられるのではないのでしょうか。

この実践例を紹介します。地元駅前の清掃奉仕活動を例にとって説明いたします。ロータリー以外の諸団体が清掃活動をやっている、もしその場で知り合いに会った時、「あなたは良いことをしてますね」と尋ねられると、他団体は「我々はクラブとして清掃活動をしております」と答えると思います。しかしロータリーの場合は、「私は、初めてこの駅に降り立った人が、駅前が汚かったならば、その人はこの町全体が汚いと思うでしょう。だから、この町の清掃活動はまずは駅前から始めなければならないと思い清掃奉仕活動をやっております。皆も同じ考えのもとに活動しております」、と答えるでしょう。つまり、やっている活動は同じでも中身の考え方が違うのです。

仮に個人の奉仕活動を一丁の鉄砲と仮定し、百人の会員がいたならば百丁の鉄砲があると仮定します。他団体は百丁の鉄砲を溶かして一門の大砲として奉仕活動をおこないます。しかしロータリーはそれぞれの鉄砲が個々の力によって百門の大砲と化して活動をおこないます。これがロータリーの奉仕活動です。

『He Profits Most Who Serves Best について』

この言葉はアーサー・フレデリック・シェルドンによって唱えられた職業奉仕の原理原則です。これには精神論は含まれておりません。実践原理です。日本語訳として「最もよく奉仕する者には、最も多く報われる」と訳されておりますが、しかし深川理論では「奉仕に徹する者には、最大の利益がある」と書か

れております。もちろん「奉仕に徹する」という言葉は、「職業倫理に徹する」ということで、その結果、ロータリアンの事業が発展し最大の利益を得ることができると言い表しております。He Profits Most Who Serves Best という言葉において一番重要な意味を持つのが Serves Best の Serves という言葉です。ロータリーにおいて最初に Serves という言葉を使ったのがシェルドンです。シェルドンは無法がまかりとおり、雨後の筍のごとく店ができては潰れ、できては潰れていく町の中で、潰れることなく継続的に利益を上げている事業所があることに注目し、これらの事業所に共通する営業状態を総称して Serves と定義いたしました。シェルドンは1913年の論文で「小さな Serves をすれば小さな利益しか得られないが、大きな Serves をすれば大きな Profits (利益) を得られる」と言っております。それではシェルドンが言っているロータリーにおける Serves とはいかなるものか。シェルドンはサービスとは無料で商品や技術を人に与えるのではなく、社会のニーズに適した商品や技術を適正なる価格で提供することによって、売り手と買い手が互いに信用と信頼で結ばれ、それによって継続的な利益が得られる。これがロータリーにおける Serves であると言っております。又、それによって得た利益を決して独り占めすることなく、皆で分け合っていくことも重要であると言っております。つまり、顧客との信頼関係に基づいて品物や技術を通して社会に Serves するところにあります。Profits とは一時的な利益ではなく、継続的な利益を意味し、社会に Serves した見返りに Profits を得ているのです。職業奉仕は単に金を儲けるための手段ではなく、品物や技術を売っていかに顧客がそれによって満足を得るか幸せになるかなのです。但し、それには非常に高い倫理基準を持つ必要があり、それは職業奉仕を実践した結果となります。

ここで実践例を紹介いたします。日本で最初に電気洗濯機を作ったのがサン

ヨー電気です。何故、サンヨー電気は洗濯機を作ったのかです。それまでは、家庭の主婦が毎日、川や桶で洗濯いたします。量にもよりますが、1時間以上をかけて、又寒い日は非常につらい重労働です。それを見た社員が、このような主婦の重労働を何とか助けてあげたい、輸入品は高価で一般の人にはとても手が出ないけど、できるだけ安く一般の人にも買える洗濯機を作ってあげれば、主婦の労働が軽減され楽になるのではないかという考えのもとで、試行錯誤の末、電気洗濯機を開発いたしました。しかし、作ってもなかなか売れなかった。それではということで、絞り機もつけて販売したのです。しかし、安いからといってまだ一般庶民にとっては高値の花であり、だいいちそんなものは贅沢であるという考えが日本ではまだありました。しかし、主婦にとって洗濯機はどうしてもほしいものであり、徐々に普及し始めると、あっという間に全国に普及いたしました。もし、ここで洗濯機を作れば儲けるという発想であったとしたならば、売れなければそれで作るのをやめてしまいます。しかし、たとえその時は売れなくても、この製品は主婦の役に立つ、社会に役立つものである、という思いが後に結婚時の3種の神器となり、爆発的に売れ出したのです。

このようにロータリーの職業奉仕の基本的な考えは、儲けのために職業を営んでいるのではなく、品物や技術を通じて社会により素晴らしいものを提供するために職業を営んでいるという心を持ち、その見返りとして利益を得ているという心を持たなければなりません。世のため、人のために職業を通じて尽くしたその結果、報酬を得るのです。そしてその報酬は決して独り占めすることなく、自分の取り分以外の儲けたお金は、株主に配当金として、従業員に特別賞与として、そして内部留保として配分しなければなりません（利益の適正配分の原則）。これがロータリーにおける **Serves** なのです。

サンヨー電気は電気洗濯機という商品を社会のニーズに応じて売ることによ

り利益を得て満足いたします。また、顧客は今までの重労働から解放してくれた洗濯機を適正なる値段で買うことによりサンヨー電気に感謝いたします。ロータリーはこの「商品と金銭」の交換だけではなく、売り手と買い手との「満足と感謝」の交換が重要であるといっております。この「満足と感謝」が重なった所を、ロータリーでは抽象的な表現で「**利己と利他の調和**」という言葉で表現されます。

しかし、この **He Profits Most Who Serves Best** という言葉に対し、RI では非常に強い反発があります。“**Service above self**” 超我の奉仕のもと、崇高なるロータリー精神において「ロータリアンの金儲けを問題にするのはいかなものか」、「職業倫理を守ることは当然であり、わざわざそれを強調する必要はない」という意見が多数を占めております。毎年のようにこのモットーを廃止しようとする意見があります。つまり職業奉仕廃止論です。

ロータリーの奉仕理念の根底をなすものは職業奉仕実践理論である“**He Profits Most Who Serves Best**”です。RI では、社会奉仕や国際奉仕に重点を置き、広報活動を活発にすれば、会員減少を防ぎ、増強に結びつくのではないかという間違った考えがあるのではないかと私は思っております。確かに、社会奉仕や国際奉仕は発展性や意外性のある非常に面白い活動です。しかしそればかりをやっていると、本来のロータリーの魅力が失われ、他団体と何ら変わりのない、単なる寄付団体、慈善団体、ボランティア団体になってしまうのではないかと思っております。

ここで職業奉仕の各論を簡単に説明しておきます。「**アフターサービスの原則**」：たとえ1年限りの保障期間であったとしてもロータリアンは徹底してその商品に対し最後まで責任をおわなければなりません。それが顧客との永続的な信用信頼関係に結びつき、その結果、事業が傾こうとも将来的に見て絶大なる

信用をもって報いられるのです。「**適正価格の厳守**」：たとえば、ある商品が品不足になり従来の利益の2倍～3倍で売れるとしても、それは顧客が不幸になるだけであって、必ず反動があり、一時的な利益はすぐに消えてしまいます。不景気になれば必ずあくどく儲けた商人は消えていきます。職業倫理に基づく利益こそが永続的に利潤を得ることができるのです。「**誇大広告の禁止**」：ロータリーは物を売る前の誇大広告を禁止しております。真実のみを語るべし、と説いております。それは顧客との信頼関係を裏切ることになるからです。「**利益の適正配分の原則**」：商人は自分だけが儲かってはいけません。正しく得た利益を適正に配分しなければなりません。自分の取り分以外の儲けたお金は、株主に配当金として、従業員に特別賞与として、そして内部留保として配分しなければなりません。そうすることにより労働意欲が湧き、より以上の利潤を生むのです。そして、もしまだお金が余っているのであるならば顧客にも利益を配分しなければならぬのです。「**賄賂の禁止**」：これは公務員に対するだけの話ではなく、広く人間としての賄賂の授受を禁止しております。正当な所得以外の一切の金品の授受を全て賄賂とみなします。これがロータリーの倫理概念です。

『職業奉仕と社会奉仕について』

ここで非常に誤解を生む言葉を紹介いたします。それは、「自分の職業を通じて、社会に奉仕をするのが職業奉仕である」と思われている方が非常に多くおられます。自分の職業であろうがなかろうが「社会に奉仕をする」のですから、この奉仕活動は読んで字のごとく「社会奉仕」です。では、この言葉の中に職業奉仕が含まれないのかということそうではありません。だから誤解を生む言葉なのです。では、どのように区別するのか。それは、奉仕活動に対して「**受益者が誰であるか**」で区別することができます。奉仕活動によって地域の人々、

地域社会が受益者になる場合、これが「社会奉仕」です。そして自分がおこなった奉仕活動によって「自分自身」が受益者になる場合、これが「職業奉仕」です。例えば大地震が起き地域全体が壊滅してしまつたとします。その時、その地域のパン屋さんが幸いにも自分の店だけが助かつたとします。そして食べる物がない被災者のために少しでも役に立ってもらおうと自分が作ったパンを無料で配つたとします。この奉仕活動で誰が受益者であるかを考えてください。当然、受益者はパンをいただいた地域の人々ですから、この意味から言えば、この奉仕活動は社会奉仕です。では、この奉仕活動で受益者が自分自身になる職業奉仕はどの場合であるかです。それは、食べる物がなく困っていた人々がこのパン屋さんに、どのような感情を持ったのかを考えてください。私は、間違いなく地域の人々がこのパン屋さんに感謝の気持ちを持つに違いないと思います。そしてその感謝の気持ちは尊敬と信頼、信用を生みます。つまり、このパン屋さんは自分がおこなった奉仕活動で感謝と尊敬、信頼、信用を地域の人々から得るといふことになります。そして復興がなつた時、人々は、「あの時はありがとうございました、あのパンは美味しかった」、という感謝と尊敬、信頼、信用を込めてその店にパンを買いに行くでしょう。この時、初めて「自分の職業を通じて、社会に奉仕をした」この奉仕活動によって**利益**を得るといふことになり、受益者が自分となり、この奉仕活動は「**職業奉仕**」となるのです。もし、災害という人の弱みにつけこんで、売れるからといって100円のパンを2倍3倍の値で売つたならば、それは一時的には儲かつたとしても永続的な儲けにはつながりません（適正価格の厳守）。このパン屋さんは儲けようと思ってパンを配つたのではなく、世のため人のためにパンを配つたのです。その心が（奉仕の心）、自分の商売を繁栄させるのです。これが職業奉仕です。

私は、「**職業奉仕と社会奉仕は一對のもの**」であると考えております。社会奉

仕をすれば、地域の人々から感謝と尊敬、信頼、信用を得て、その反射的効果として利益を生むのです。受益者が自分となるのです。社会奉仕と職業奉仕の関係からすれば、**He Profits Most Who Serves Best**「最もよく奉仕する者には、最も多く報われる」という言葉は、たくさん社会奉仕をすればするほど、地域社会から感謝と尊敬、信頼、信用を得て、その結果、自分の職業が繁栄するという意味になります。奉仕に徹することにより、最大の利益を得るのです。だからロータリーは社会奉仕をおろそかにしてはいけないのです。

『例会出席と職業奉仕実践について』

新入会員の中には、「何故、ロータリークラブは毎週毎週例会を開かなければならないのか。毎週一回の例会に出席し、食事をし（しない所もある）、話を聞いて、寄付をして帰る。そんな無駄な時間をついやすのならば、その時間をボランティア活動に当てるほうが、よほど世のため人のためになるのではないですか」という意見を持たれている方がいます。「何故、ロータリーは毎週一回の例会を開かなければならないのか」です。私は『I serve と We serve について』の項で、「倫理を学び、人間の人格を向上させ、それをもって初めて職業社会にそして社会的弱者に対して奉仕ができるのです。ロータリーの第一義は何か、それはロータリアンの心の開発です。」とっております。では、ロータリアンは何処で倫理を学ぶのか、それは「**例会**」です。異業種の有益な職業人の中から選ばれた会員が、毎週一回の例会に出席し、ある時は先生となり、また生徒となって、集団で学びあうのです。異業種の有益な人達との交流を通じて、ロータリアン自らが心を磨きあうのです。そしてその心を、個人生活、職業社会、地域社会、国際社会で実践するのです。まずはロータリアン自らが学ばなけれ

ば、世の中に倫理を提唱できないのです。自分たちの子供が毎日勉強のため学校に通うのと同じように、ロータリアンも倫理を勉強するために毎週一回ロータリーという学校に通うのです。例会場は教室であり、会費は授業料です。ネクタイ着用は制服の意味があります。学校ではいつも出席をとるのと同じように、例会でも出席をとります。出席はロータリアンの義務でもあります（他の義務は会費の納入、ロータリーの友の購読）。もし仮に、寄付だけを専門に扱う団体であるのならば毎週例会を開く必要はなく、お金だけを出しておけばいいのです。社会奉仕活動のみをしたければ、それを専門に扱っている数多くのボランティア団体に入ればいいのであって、ロータリーに入った意義がありません。ロータリアンは毎週例会場へ通い、人間のあるべき姿を学びあうのです。「ロータリアンよ、まずは学びなさい」であります。松下幸之助氏は経営理念を尋ねられたとき、「まずは人づくり、合わせて製品を作っております」と答えられました。この人こそロータリーの職業奉仕を实践されたロータリアンの見本であり、もちろん大阪 RC 所属でした。そして、例会にはひとつの大原則があります。それは、「均一的平等の原則」です。たった一人で商売をしている商人でも、何千人も雇っている大会社の経営者でも、例会場においては皆が平等であるという原則があります。自分の職業は天職であると考え、天職と天職の間には価値の相違はないのです。ロータリアン同士が対等の立場に立って、お互いが学びあうのです。ロータリー綱領の第二に示されている「あらゆる有用な業務は尊重されるべきである」という認識を深めること」がこれです。米山梅吉氏は「例会は人生の道場である」と言っております。即ち、職業奉仕の实践とは毎週一回の例会出席から始まるのです。

『決議 23-34号について』

「決議 23-34」は手続要覧では社会奉仕の部で書かれております。しかし、社会奉仕のみならず、ロータリー活動全般にわたっての基本理念、奉仕哲学が書かれたもので、そして、それを突き詰めていくと「ロータリーの奉仕とは何か」ということとなります。この1923年の**決議 23-34号（セントルイス宣言）**の内容は6条に分かれており、6条目にはクラブとして団体奉仕活動をする場合の指針が7項目に分かれて示されております。非常に重要な決議文ですが少々難解な文章もありますので簡単に説明させていただきます。

第1条、ロータリーの思想。

この第1条を要約すれば、「ロータリーは利己の心（自分を最優先にしようと思う心）と利他の心（他人のために尽くそうと思う心）とが互いに葛藤を繰り返している。その葛藤を和らげるのが、奉仕哲学である“SERVICE ABOVE SELF”（超我の奉仕）と職業奉仕実践理論である“HE PROFITS MOST WHO SERVES BEST”（最もよく奉仕する者には、最も多く報われるである）」、と記されております。この決議文において、ここが一番難解な点で、これを理解するには、決議文が採択された当時のロータリー内部の状況を理解する必要があります。この決議文（原文）が示された時期はロータリー運動において、ポール・ハリス、アーサー・F・シェルドンが唱える職業奉仕を基礎とする理論派と、エドガー・アレン（エリリア RC）を中心とする人道主義的活動派（身体障害者問題）が互いに主張しあい、ついには全米のロータリークラブを巻き込んだ大論争が繰り広げられ、ロータリー自体がどうにもならない混乱状態に陥った時期でした。この身体障害者問題というのは、当時アメリ

カではポリオが大流行し大きな社会問題となっておりました。エドガー・アレンは個人でのポリオ救済活動よりも、組織としての障害児救済活動をめざしエリリア RC に入会いたしました。彼は自クラブだけではなく、近隣クラブにも応援を求め、RI に対し、全てのロータリークラブが一丸となって身体障害者問題に取り組むよう要請し、1922 年のロサンゼルス国際大会で障害児救済活動決議案（決議第 17 号）を採択させることに成功いたしました。ところが、これが大論争の火付けとなったのです。理論派の主張は、「ロータリーは職業人、実業家の組織であるから職業上の問題に力を注ぐべきであり、社会問題には関心を寄せるだけでよく、言論的唱導機関であるべきだ」「各クラブはそれぞれ完全な自治権を持っており、他からあれこれ指図されるいわれはない」「ロータリーは個人奉仕が主体で、このような問題には直接関与すべきではない」という意見です。しかし、人道主義的活動派の主張は、「今、アメリカではポリオが多発し大きな社会問題となっている。この重大事において個人よりも全米のクラブが一丸となって身体障害者の救済をしなければならぬ。このような社会的大問題に直面しながら、言論的唱導機関などと言って逃げるのは卑怯な責任回避である。単に口先だけの問題ではなく、実践的且つ金銭的活動が必要であり、団体的活動も必要である。」と主張し、互いが一步も引かず、分裂の危機に瀕しておりました。そこでロータリーは奉仕の実践についての「個人奉仕か団体奉仕か」に関する明確な方針を示さなければならなくなったのです。ここにおいて、分裂を回避すべき救世主として現れたのがテネシー州ナッシュビル RC です。このクラブは 1923 年のセントルイス国際大会において、この混乱を沈めるための回答というべき決議案（決議 34 号）を提出いたしました。これが即ち決議 23-34 です。この決議文第 1 条において“**SERVICE ABOVE SELF**”「超我の奉仕」と“**HE**

PROFITS MOST WHO SERVES BEST 「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」が「ロータリーにおける二つのモットー」であると明示しております。私たちが人間として、弱者に涙しながら、人道的奉仕活動をすべきだという社会奉仕のモットーが“SERVICE ABOVE SELF”です。そして、品物や技術を通じて社会に奉仕するために職業を営み、その見返りに利益が得られるという職業奉仕のモットーが“HE PROFITS MOST WHO SERVES BEST”です。この二つのモットーの意味するところは、「人道的救済活動、つまり社会奉仕だけがロータリーではなく、また職業奉仕理念だけがロータリーでもない。それぞれが互いに協力し合いながら活動するのがロータリーである」。ということの意味しております。つまり、ロータリーは決して一枚岩の思想ではないということです。ロータリーには古来より色々な思想が混在し現代に至っております。しかしロータリーは、『それぞれが互いの思想を排除することなく、いつも「寛容の精神」をもって、自分とは違う思想の存在を認めあい、そしてお互いが学びあわなければいけないのである』ということをこの第1条で宣言しております。この第1条で行動派と理論派の主張をそれぞれ認めることにより論争に終止符をうとうとしたのです。そして、第2条以下は、クラブとR Iとの定義とそれぞれの役割、奉仕の実践に関する詳細を定めることにより、理論派と人道主義的活動派、双方の主張をかみ合わせ分裂を回避したのです。

第2条、クラブの役割。

(1) 例会において会員全員で奉仕理念を学ぶ。(2) 地域社会において奉仕の実践例をクラブとして示さなければならない。これは奉仕の実践は個人が行うのが原則ではあるが、サンプルとしての実践例をクラブで示さなければならない。(3) 会員は個人として奉仕理念を実践に移さなければならない。

い。（４）ロータリーの奉仕理念を一般の人々に受け入れてもらわなければならない。それには社会のニーズにあった実践が必要であり、ロータリアンだけが満足するような実践であってはならない。

第3条、国際ロータリーの役割。

（１）R Iは奉仕理念の育成、普及をしなければならない。（２）R Iはクラブの拡大、援助、管理をしなければならない。（３）R Iは情報の相互伝達、クラブ運営の標準化をしなければならない。この3つがR Iの主な役割であると記されております。しかしR Iは奉仕活動の実践例を提案することがあっても、「強制ではなく有益な助言を与える」と記されているように、R Iは奉仕活動の実践を押し付けることはできません。奉仕活動の実践はクラブ自治権の範疇にあり、R Iが提示してきたものを必ずしも実践しなければならないという義務はありません。クラブの「CLP」実践においてもR Iや地区が強制するものではなく、クラブに決定権があるのであって、実践するのもしないのもクラブの自由です。

第4条、ロータリーの奉仕とは何か。

これは口先だけの理論ではなく、ロータリアン個人も又、クラブとしても奉仕理論は行動をもって実践しなければならない。継続的奉仕活動以外の奉仕活動は当該年度内に終了するものが望ましい。そしてそれは地域ニーズに合った奉仕活動であり、クラブ会員全員の参加でなくてはならない。

第5条。ロータリークラブ自治権と国際ロータリーの関係。

ロータリークラブはR Iの定款、細則、綱領、クラブ定款に違反しない限り絶対的自治権、自主独立性を持ち、自由に活動を行なうことができる。R Iはクラブ自治権に対し、制約や禁止事項を設けてはならないことが明記されております。しかし、そうだからといってクラブが身勝手に行動するので

はなく、R I からの指導や助言、他クラブの実践例を謙虚に学ぶ姿勢を持たなければなりません。

第6条。ロータリークラブとしての社会奉仕活動に対して守るべき指針。

(1) ロータリーは地域の商工会議所等において地域のニーズを調べる必要がある。しかし、既にそのニーズの専門事業団体があれば邪魔や横取りをしてはならない。(2) 奉仕事業においてクラブがその全責任を負わなければならない。(3) 奉仕活動を個人及びクラブの宣伝活動にしてはならない。しかし、地域社会に対して、ロータリーの精神を認識してもらい、それを拡大する方法として、有益な奉仕事業においてはクラブとしての実践例を広報しなければならない。(4) 他の団体との重複活動の禁止。(5) 現存している奉仕団体への協力。(6) その地域に即した新しい奉仕活動を開拓し、その活動に従事する専門団体を育成し、なるべく早い段階でその団体に活動を委譲すべきである。そして、その功績を自分の手柄にしてはならない。(7) 団体奉仕よりもロータリアン個々の力を発揮できる奉仕活動をすべきであり、それはロータリアン個人に奉仕の訓練を施すためのものである。

以上が決議23-34の説明です。1923年のセントルイス大会で採択されたこの決議文は、その後、幾つかの修正を加えられながら手続要覧では「社会奉仕の部」に乗っております。しかし単に社会奉仕の指針にとどまらず、ロータリーの基本理念、奉仕哲学が記されたものでもあります。

『ロータリー綱領と4つのテストについて』

最後にロータリー綱領と4つのテストについて述べさせていただきます。4つのテストは皆様方よくご存知ですが、ロータリー綱領については理解されている方が少ないように思えます。何処に書かれているのかさえ知らない人が

おられます。手続要覧の黄色い色の用紙の所に書かれておりますが、一番身近なところではロータリー手帳の見開きの所に書かれております。非常に抽象的な言葉で言い表されているため難解な文章となっております。ここでは簡単に説明させていただきます。

綱領本文において、「ロータリーの綱領は有益な事業の基礎として奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、特に次の各項を鼓吹育成する」と書かれております。この文において、「有益な事業の基礎として」が中心概念であり、ロータリーの目的は「職業奉仕」にあることを表現しております。但し、非常に抽象的な言葉で言い表されているため、何通りにも解釈されることもあり補足（構成要素）として4か条を規定しております。

第1項目：「奉仕の機会として知り合いを広めること」（クラブ奉仕の定義）

初期ロータリーでは「親睦を深める」Encouragement of fellowship と書かれていましたが、後に「知り合いを広める」Development of acquaintance に変わりました。これは、「親睦」を会員同士の物質的相互扶助と解釈されるのを防ぐためであり、「知り合いを広める」と改めることにより、知り合いの人をロータリーに引き込もうとする意図があります。つまり、会員増強です。ただし、ポール・ハリスは“ロータリーの本体は親睦と奉仕の調和の中に宿る”と言っているように、第1項目を「親睦」とし、「心の友を得ることによって奉仕を実践しよう」という意味があり、そしてこの親睦は社交的な親睦ではなく、心の友を得ることにより互いに切磋琢磨し、それによって人間性の向上をはかる。これが奉仕の契機となるものであるという考えもあります。

第2項目：「①事業及び専門職務の道徳的水準を高めること。②あらゆる有用な職務は尊重されるべきであるという認識を深めること。③ロータリアン各自が、業務を通じて社会に奉仕するために、その業務を品位あらしめること」（職業奉

仕の定義)

この文章は3つに分かれており、あえて番号を打たせていただきました。説明としては①からではなく③から説明したほうが分かりやすいので③から説明いたします。③ロータリアンは職業を利潤追求だけのものであると思わず、自分の職業を天職と思い、社会的責任を自覚し、世のため人のために営んでいるという心を持つべきである。②そして、その心を勉強するためには例会に出席しなければならない(均一的平等の法則)。従って、パストガバナも昨日入会した新入会員でも平等な立場で学びあう。③例会では奉仕の心を学び、まず自分の業務を品位の高いものにしなければならず、それをもって初めて社会に倫理を提唱できるのである。

第3項目：「ロータリアンすべてがその個人生活、事業生活および社会生活に常に奉仕の理想を適用する」。(ロータリーの奉仕活動実践に対する定義)。

ここで重要なのは、「ロータリアン全てが」と書かれている点です。クラブで団体奉仕(We serve)するのではなく、ロータリアン一人ひとり(I serve)が奉仕の実践をしなければならないのです。例会で学んだ奉仕の心を、まずは個人生活に、家庭に、自分の職業社会に実践する。そして地域社会に広めていくのです。

第4項：「奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職務に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること。(国際奉仕の定義)

ロータリーは地域社会のみならず、その延長線上にある国際社会に目を向けております。第1次世界大戦を契機に、人類平等、戦争の再発防止、人類の平和と繁栄に寄与することを目的に、1921年のエディンバラ国際大会において綱領の第4項に付け加えられました。国際奉仕活動はロータリアン同士の親睦と相

互理解によって世界平和を目指すものです。また、WCS 等の人道的援助も含まれます。以上がロータリー綱領を簡単に説明させていただきました。しかし、綱領は英語の解釈の違いで、人によっては意味合いが少し違った解釈があります。

「4つのテスト」

これはロータリーが独自に作ったものではありません。ハーバート・テイラーが倒産寸前だった、クラブ・アルミニウム社の再建を10年で一流の企業に育てたスローガンが「4つのテスト」でした。そのスローガンを彼が1954年に国際ロータリー会長に就任したのを契機に、その著作権をRIに無償で寄付したのが始まりです。ここにロータリーの「ノウ・ハウの公開」という原則があります。自分が成功したからといって、そのノウ・ハウを秘密のものにしてはいけないのです。ここで言っているノウ・ハウは産業秘密的なものではありません。成功したことが完全に立証されたノウ・ハウです。これを事業に失敗した人や、同業者に公開することで共存共栄がはかられ、ロータリアンがその業界のリーダーシップをとるということになります。これが職業倫理の提唱です。そして、ハーバート・テイラーは4つのテストは商道徳高揚のスローガンだけではなく、またロータリーに限らず、**人生全般の判断基準**として利用されるものであると言っております。

「フォアウェイ」とは「4つ辻」でもあるといわれております。人が4つ辻に辿り着き、左右前後どの道を歩むのかを考えると、どの道が正しく、どの道が悪しき道なのかを考える判断基準でもあります。この和訳は昭和29年に各地のロータリークラブから和訳を募集して、わかり易く、問いかけるもの、そして抽象的な言葉でないものが選ばれました。

『職業奉仕総論』

私は、職業奉仕がロータリー思想そのものであると思っております。しかし、RIの考えるロータリー思想では異論があるようです。ロータリーは「一業種一人」という大原則のもとに相互扶助と親睦を基本に生まれました。本来のロータリーは職業奉仕を基礎とし、そのうえに社会奉仕や国際奉仕が存在するものです。むやみやたらに社会奉仕事業を考え、黙って寄付さえすれば、それがロータリー活動そのものであるという風潮が今のロータリーにはあるのではないかと考えております。倫理無き人間がいかにして職業社会にまた、一般社会に倫理を提唱することができるかです。ここに私が思う本来のロータリーの姿があり、職業奉仕の基礎でもあると思っております。

「職業奉仕がロータリーの命」であると言われますが、私は命ではなく「ひとつの思想」であると思っております。ロータリーには奉仕原理である

“SERVICE ABOVE SELF”と職業奉仕実践理論原理である“HE PROFITS MOST WHO SERVES BEST”という二大思想が存在します。その他にも“SERVICE NOT SELF”があります。もし命としたならば、命は一つですから職業奉仕思想が廃止されたならばロータリーそのものも亡くなってしまふということになります。ロータリーには色々な思想が混在しております。決して一枚岩ではありません。しかし、それぞれの思想はお互いの思想を排除することなく、認め合い、お互いが学びあう姿勢が重要です。私は、社会奉仕と職業奉仕は「一対」であると思っておりますが、これはお互いが学びあった結果なのです。

“公共奉仕”即ちロータリー第一モットーである“SERVICE ABOVE SELF”超我の奉仕によってロータリーは大発展し世界最大の奉仕団体となりました。もし、職業奉仕だけのロータリーであったとしたならば、結果は違っていたのかもしれない。では、超我の奉仕とは何か。「自己に優先して奉仕を・奉

仕第一、自己第二」。私はこの言葉を短絡的に解釈すれば、「自分というものが一番大切なものです、しかし、それ以上に社会的弱者に対して愛情をもって自分以上に大切にし、援助しなければならない」と言っているのではないのでしょうか。これが現代ロータリーの主流である「奉仕の理想」です。しかし私は、この言葉を本来のロータリー思想である職業奉仕思想から言うと、「自分というものが一番大切なものです、しかし、それ以上にお客様を大切にしなければならない」と私はこの言葉を解釈しております。職業奉仕を基礎とするならば、社会奉仕や国際奉仕はそれの応用問題ではないのでしょうか。

「職業奉仕も社会奉仕もロータリークラブの命であり、あえて奉仕内容を選別し議論することは無意味である」という意見もありますが、もしそうだとしたならば「同じ命ならば、難解な職業奉仕を社会奉仕の中に入れてしまったらどうか、社会奉仕だけで良いのではないか」という誤解が生まれます。私は「奉仕による受益者が誰であるか」という説明で、ロータリーにおける社会奉仕と、職業奉仕とを明確に選別することにより、両者は「職業奉仕を基礎とする、一対の奉仕活動である」ことを分かってもらわなくてはならないと思っております。では私にとってロータリーの命とは何か。それは「人間の倫理を持って奉仕に徹する」。これこそ私が信じる「ロータリーの命」であると思っております。

私は、職業奉仕の考えにたいし教条主義的な考えは持っておりません。職業奉仕クラブ委員長会議やクラブ卓話において、ロータリアンに「職業奉仕を実践せよ」とは一言もいっておりません。理解してくださいと言っております。職業奉仕はロータリーにおける一つの思想であり強制はできないのであって、宗教ではありません。実践するのもしないのもロータリアン個人の考えです。但し、知らずして語る無かれであり、まずは知って頂き、理解して頂きたいの

が私の願望です。次に、「ロータリークラブは職業奉仕が中心であり、この点
が他団体との違いである」という意見に対して、私は、「他団体に無い特色がロー
タリーの職業奉仕である」と考えております。国際奉仕や社会奉仕こそが「ロ
ータリーの命」と考える人がいても、それは間違いではありません。ロータリ
ーは色々な思想の塊です。職業奉仕は「大地」です、そしてその上に社会奉
仕や国際奉仕、クラブ奉仕が樹木として育っていきます。大地に水をやらな
くは何も育ちません。そして、その水をやる人間も必要ではないでしょ
うか。新入会員の方が、「こんな難しい話を聞いて奉仕をするよりも、単にお
金を寄付し、ボランティア活動さえしていればいいのだ」ということを言わ
れたことがあります。何故、ロータリーは毎週例会を開くのか、寄付をしな
ければならないのか、ロータリーの職業奉仕思想、社会奉仕思想を知らずに
活動されている方が多いように思えます。ロータリーはむやみやたらに社会
奉仕や寄付をするものではありません。

私が入会した当時は非常に厳しく「出席」を言われました。今のロータリ
ーは出席についてあまり何も言いません。RIは一業種一人という大原則を崩
しております。単に会費を払うだけの長期欠席者が退会もせずにあります。卓
話は無意味であると言われる方がいます。今、ロータリーの意義が忘れ去ら
れようとしております。多少の出血は覚悟しても、今こそロータリーの原点
に立ち戻らなければならないのではないのでしょうか。その方法のひとつとし
てこの冊子が利用されれば幸甚に思っております。

おわりに

職業奉仕は現代の経済に合わない懐古思想であり、絵に描いた餅であると言
われる方がおられます。確かに、ポール・ハリスやシェルドンがいた時代では

考えられないぐらい経済が発展し、パソコン一台あれば発注から決算まで全てが済む時代です。インターネットの発達により物を売る方法が違ってきております。しかし、日本のバブル経済の崩壊が示したように、目先のお金儲けだけを考える商法は長続きいたしません。食肉の偽装問題、賞味期限の問題、果ては客が食べ残したものを又客に出すといった初歩的な職業倫理に反したことで有名企業が倒産に追い込まれた事例が後を絶ちません。どのように時代が変わろうともロータリー職業奉仕の実践原理である“HE PROFITS MOST WHO SERVES BEST”「職業倫理に徹する者は、最大の利益を得る」というこの言葉こそが、ロータリアンにとって永続的に利益を得る唯一の方法であることを理解しなければならぬのです。

最後に、この小冊子を作成するにあたり大変ご尽力いただきました第 2640 地区ガバナー勝野露観様、同地区職業奉カウンセラー三軒久義パストガバナー様、同地区代表幹事桃田隆彦様には厚く感謝申し上げます。

参考文献：ロータリー情報マニュアル。ロータリー学入門。職業奉仕の重要性と未来展望。奉仕の一世紀。